

教室活動報告1：2022年度「舞台文化資源論実習」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学文化資源学会 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田中, 章浩 メールアドレス: 所属: 大阪公立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006561

教室活動報告 1

2022 年度「舞台文化資源論実習」

小田中 章浩

1. 「舞台文化資源論実習」の狙い

この授業は、前期の「舞台文化資源論演習」とペアになっています。「舞台文化資源論演習」では、演習形式で戯曲の構造、登場人物の造形、台詞の作り方などを学ぶのに対して、「舞台文化資源論実習」では学生が役割を分担して実際の舞台作りに取り組んでももらいます。ただしそれは単にお芝居をすることが目的ではありません。演劇の上演は、社会において人々が協働してプロジェクトを実現していくことと同じであり、そのシミュレーションです。この授業は、プロジェクトの遂行における参加者の役割分担や責任の重要性、あるいは突発的な事態に対する対処法を学んでもらうことが目的です。

2. 2022 年度の「舞台文化資源論実習」

2022 年度の「舞台文化資源論実習」の受講者は 17 名（文化資源コース 11 名、表現文化コース 5 名、地理学コース 1 名）でした。上演の場所、公演日、台本の選定、役割分担（俳優、演出、裏方等）は学生が決め、教員は必要に応じてアドバイスをを行いました。まず公演日は 2023 年 2 月 8 日、会場は杉本キャンパスにある田中記念館ホールになりました。台本は、学生によるいくつかの提案のあと、既成の作品『プロパガンダ・ゲーム』からその設定のみを借りて、文学部の学生が文学部の存在意義についてディベートを行うという内容の創作劇とすることになりました。

授業が行われた後期全体で制作の流れを振り返ると、10 月は会場、公演日、上演作品の選定に宛て、11 月は台本制作チームによる台本作成とその批評、12 月以降は公演に向けた裏方の準備、俳優の練習に宛てられました。

結果として制作 2 名、脚本チーム 4 名、演出 1 名、俳優 8 名、裏方（舞台監督、照明、美術、情報宣伝）5 名の体制となりました（複数の仕事を兼ねている人がいたので、延べ人数は受講者数を上回る）。このうち、サークルで芝居の上演

を経験したことがあるのは4名で、あとは全員舞台の未経験者でした。

作品（題名は『リクルート・ゲーム 文学部の憂鬱』）の内容を、公演の宣伝で用いたキャッチコピーから引用すると以下のようになります。

某大手広告代理店のインターンシップ。そこでの課題は、大学に文学部は必要かどうかを、文学部の学生に論じさせることだった！ディベートの勝者には内定が与えられるという。この究極のサバイバル・ゲームの行方は？ 今日の大学教育のあり方について、文学部の学生が考えた問題作。

公演は大学広報を通じて事前に大学のホームページで宣伝を行いました。集まった観客は約50名でした。そのなかには、少なくとも私が確認したかぎりでは、文学部の教員3名、職員4名、読売新聞の記者1名が含まれていました（広報を通じて取材の申し込みあり）。

この公演のユニークなところは、単に芝居の上演（約50分）を行っただけでなく、公演後に約30分のアフタートークの時間を設けて観客とディスカッションを行なったことです。これは芝居のテーマが大学教育における文学部の存在意義というものだったので有意義でした。



3. 2022年度の「舞台文化資源論実習」で得られた学び

公演後、受講者に2回のレポートの提出を求めました。初回のレポートの内容は、担当した役割とそれについての自己評価、反省点です。これらをまとめたものを私が学生にフィードバックし、2回目のレポートを課しました（テーマは、今回の公演を通じて演劇に対する見方がどのように変わったか。さらに今回の公

演を通じて考えた「文学部の学びの本質」について)。2 回目のレポートの 2 番目のテーマについて書かれた一部を引用すると以下のようになります。

□ 人間は、生きていく上でたくさんの「無駄なもの」を必要とする生き物である。ここでいう「無駄」とは社会や科学的技術、またそれらから連なる人間の活動維持のために必要ではないものを指す。人間は文学や物語、映画や演劇といった娯楽が無くても生命活動を維持できるが、そうした娯楽(=無駄)なものが人間を人間たらしめているのではないだろうか。

「無駄なもの」には、社会的、生命活動的に役に立つ/立たないという次元でははかりしれない価値があり、多くの人間の心の拠り所となっている。文学部では、そうした心の拠り所の成り立ちやあり方、これからの作り方を学ぶことができる。

□ 文化資源コースでの学びに限らず、文学部全体で考えてみると、文学部での学びは「答えのない問い」が多いと感じる。授業で取り上げられる事例も、まだ答えのない最新のものや、論点が多く複数の視点から考えると答えを一つに絞り切ることが出来ないもの、抽象的なものであったり、レポートのテーマとして挙げられるものも同様である。

進化を続ける現代社会では、日々新しいものが生み出され続けており、今の常識が数年後には通用しなくなることも予想される。そんな中で、思考を止めずに、自分に何が出来るのかを考え、分からないこと・未知のものにも取り組み続けることが、文学部での学びが果たす役割ではないかと考える。

□ 文学部の学びの本質は、人間について知ることである。感情、感覚を扱う文学・美術・哲学・心理、または言語などを取り上げる文学部の学びは、非常に曖昧なテーマをあえて論理的に分析するものであるため、なんらかの物質的な結果を求めるものではない。では何を求めているのかと言えば、人間を理解することである。感情、心理、視覚的な美しさなどは常に数値で表せるものではなく、法律ではっきり規定されるものでもなく、経済的な利益を産むためのものでもない。しかし、私たち全員が社会に生きる上で他者を理解する必要がある、そのためにはこの世の誰かが倫理や人の心の在り方を例として示す必要がある。文学や哲学はそのために不可欠である。もし、文学部のような人文学の学びが無ければ、お金を稼ぐことやテクノロジーを進歩させることだけが正義であるようになるが、実際はそうした正義からはじき出される人々もたくさんいるはずだ。そうした人々のやるべきこととは、今正

義とされていることに疑問を投げかけることや、そもそもの定義を考えたり、そこからはじき出される人々の有様を伝えることである。そうした人々が居なければ、誰が死刑制度や中絶禁止法の倫理性、人種差別がなぜいけないのかや障がい者の幸せについて考えるのだろうか。

人文学は不要だとする人たちは、私たちの法律やモラルが、古代から人々が歩んできた社会の歴史の中で、あやまちや成功を通して洗練されてきたということを理解していない。人文学で学ぶことのなかには、私たちの社会を成り立たせているルールの根源がある。そうしたものの上に、私たちは日々人を助けたり、戦争を批判したりしているのだ。

最後に、私が今回の授業で得たものについてお話しします。教師道の奥義が「何もしないこと」（学生の成長を見守ってできるだけ干渉しないこと）にあるとすれば、今回の授業ではそれはかなり近づけたような気がします。特に公演前の最後の一か月での学生の成長ぶりは、上のレポートからも示唆されているように驚くべきものでした。ただし「何もしない」のが教師にとってどれほど大変かとも思い知らされました（公演後、私は疲れてしばらく何もできませんでした）。それが今回の授業を通じて得られた私の「学び」です。

